

コロナ禍の研究室運営を振り返って

松村 敦^{1,a)}

概要: コロナ禍で大学での教育方法が大きく変わることになった。多くの授業は、完全オンラインもしくは対面とのハイブリッドで行われることになり、研究室での活動も同様に大きな影響を受けることとなった。比較的 IT 技術の活用に抵抗のない本研究室では、すぐにオンライン/ハイブリッドの研究室運営に移行したが、この状況が一年半近くも続くと色々な綻びが見えてくるようになった。本稿では、コロナ以降の一年半あまりの大学での状況を、主に研究室運営という視点から振り返ってみたい。

キーワード: COVID-19, 研究室運営

Reflections on Laboratory Management during the COVID-19 Pandemic

Abstract: The COVID-19 pandemic has dramatically changed the way we teach in universities. Many classes were either completely online or hybridized between online and face-to-face, and laboratory activities were greatly affected as well. Our laboratory, which has relatively little resistance to the use of IT technology, immediately shifted to online/hybrid laboratory management. However, as this situation continued for nearly a year and a half, we began to see a number of failures. In this paper, we review the situation at the university during the COVID-19 pandemic, mainly from the viewpoint of laboratory management.

Keywords: COVID-19, Laboratory Management

1. はじめに

コロナ禍で社会に多くの制限がもたらされている。大学においては授業はオンライン化し、入学しても大学へほとんど登校することもない学生も増えている。多くの大学で、この状況を解決するべく様々な試みがなされ、それらを共有する活動が広く行われている [1]。このような中、研究室での活動も同様の制限から大きな影響を受けることになっている。しかしながら、このような事例の共有はいくつか見られるものの [2]、まだ十分であるとは言えない状況である。本稿は、筆者の研究室の運営事例を題材として、コロナ禍での研究室運営についての議論の足掛かりとなることを期待するものである。

2. 研究室の概要

本研究室は、筆者を含む 2 名の教員の共同研究室として運営されている。年度によって人数構成は異なるが、最近はおおよそ大学院生 3~4 名、学部 4 年生 4~8 名程度である。2020 年度の構成は、博士後期課程 2 名、博士前期課程 2 名、学部 4 年生 6 名、2021 年度の構成は、博士後期課程 2 名、博士前期課程 2 名、学部 4 年生 4 名であり、それほど規模は大きくない。

研究室での活動は、週 1 回のゼミを基本として、適宜個別ゼミや、発表会前の発表練習がイレギュラーで行われる。大きなイベントとして、夏合宿の実施や雙峰祭（筑波大学の学園祭）への企画出展がある。

3. コロナ禍における研究室運営

コロナ禍で様々な研究室運営の変更を余儀なくされた。以下では、それらの変更とその影響について振り返る。

¹ 筑波大学 図書館情報メディア系
Faculty of Library, Information and Media Science, University of Tsukuba, Kasuga 1-2, Tsukuba-shi, Ibaraki 305-8550, Japan

^{a)} matsumur@slis.tsukuba.ac.jp

3.1 定例ゼミ

定例ゼミは、研究室の基本的な活動である。多くの研究室でそうであるように、主に進捗報告と研究のための議論を行っている。この活動が、2020年春頃からzoomによるオンラインゼミに切り替えられた。その後は、社会情勢が変わる度に対面を取り入れたり、ハイブリッドを試したりと試行錯誤を行いながら定例ゼミを実施している。

よく言われているメリットとして、オンラインゼミによって、移動時間がなくなり、参加しやすくなるという点が挙げられる。本研究室でも例外ではなく、学生からはその点に関しては高評価である。特に、起きてすぐ参加できるのが最大のメリットであるようである。

オンラインのデメリットとして、お互いの意思疎通が不十分になることである。画面越しでは、相手に意図が本当に伝わったのかどうかを判断することが難しい。しかし、このことは逆に意思表示をはっきりするなどの行動を促すことになり、コミュニケーション能力の向上という意味では良い影響も与えていると思われる。また、意思疎通の不便さを補うために、対面ゼミの時以上にテキスト、あるいは画像などで記録を共有する文化が自然に発生した。これも良い影響である。

本研究室では、定例ゼミは、大学院生と学部生で別々に行っている。2つのゼミで大きく違うのは、顔を出すか出さないかである。大学院生は、学部時代からの長い付き合いがあるため、顔を見なくても人間関係が保てそうであったことから、当初からそのような運用を行ってきた。オンラインゼミがスタートした当初は、このことは、研究の議論に集中できるという意味で良い方式であったと思う。一方、学部生は十分な関係性が成立する前からオンライン化されてしまったため、教員と学生、学生同士でも自然なコミュニケーションが難しい。これをフォローするために、顔を出したままのオンラインゼミを続けている。

しかし、長く続けていると大学院生側でもコミュニケーションが不安定になることが生じてきた。予想されていたことであるが、顔のないコミュニケーションで、研究の議論だけを続けることがストレスになっていることが考えられる。実際に、対面での個別ゼミ対応を行ってみると、研究への向き合い方も前向きになる場合がある。非常に些細なことではあるが、顔を見せるかどうかという点は、もう少し検討を要する問題だと考えている。

3.2 資料共有

コロナ禍で最もうまく機能したのは資料共有であった。コロナ以前も、Dropboxでの共有やNASを利用したアーカイブの活用はあったが、それと同時に対面でのゼミでは紙の資料で報告が行われたり、立ち上がってホワイトボードで議論したり、一部の資料はGoogle Driveで共有されたりと、情報が分散しがちであった。

これが一気にオンライン化されることになり、いつでも資料を共有できるように、1箇所への集約が進められた。この時、本研究室で活躍したのはscrapbox(<https://scrapbox.io/>)であった。ゼミの議事録も、研究室の計算機資源情報も、過去の卒業論文も、全てが研究室の共用プロジェクトにまとめられるようになり、そこにアクセスすれば、研究室の情報がほぼ全てアクセス可能となった。2020年度はゼミ生が個別にプロジェクトを作成していたが、2021年度は各自が作る定例ゼミの資料も共有スペースに作成するようにしたため、研究のおおよその進捗管理はもちろん、ゼミ生の生存確認にも利用可能となったことも良い効果であった。

また、scrapboxという新しい資料共有方法に移行したため、教員も手探りで使い方を考えていく形となり、その結果、こちらが想定して準備した使い方以外にも、学生が自分たちで新しい使い方を提案してくるようになった。このような学生の積極的な姿勢が促されたことは副次的な効果であった。

3.3 日常のコミュニケーション

学生が日常的に活動する共同研究室は、フリーアドレス制をとっている。各自が毎回好きな席に座ってノートパソコンを広げて研究を行う。コロナ以前は、ちょっとした休憩で目と目が合えば、雑談が始まりコミュニケーションが気楽にできた。筆者も、共同研究室で学生に混じって作業することも多く、学生の様子や進捗など、気楽に把握することが可能であった。

この環境は、研究室外の学生にも非常に好評であり、全く知らない学生が混じって作業していることもよくある。そうして集まった学生達が雑談から研究の話まで賑やかに喋っていて、ある意味でラーニングコモンズが自然発生しているような場であった。

この環境をオンラインで実現することは大変に難しく、Discord(<https://discord.com>)やSpatialChat(<https://spatial.chat/>)などのオンラインコミュニケーションツールを常時アクセス可能にしておくなど試みたが、対面でのコミュニケーションとは程遠く、未だ解決に至っていない。

そして、この環境を失ったことが学生のメンタルヘルスに大きな影響を与えていることを実感している。オンラインの研究室運営に入ってから、学生が不調をきたすことが多くあり、対面での雑談環境をオンラインで実現することは大きな課題である。

3.4 イベント

イベントの実施も本研究室の大きな特徴である。2大イベントとして、雙峰祭(筑波大学の学園祭)での企画と夏合宿があり、これらは2010年から毎年実施してきた。こ

これらのイベントの実施は、研究活動とは少し違った角度から、学生の成長を狙うものである。基本的に、卒業研究などの研究活動は個人の活動であるが、これらのイベントは、研究室として一つのプロジェクトを遂行する。プロジェクト管理や、共同作業を学ぶ良い機会であり、またチームとしての研究室を強める仕掛けでもある。

しかし、2020年度はこれらの両イベントが実施できなくなった。雙峰祭はそもそも開催中止となり、夏合宿も集団で旅行に行けるような状況ではなかった。このことによる影響に関しては、明らかに大きな経験が失われたと個人的には考えているが、現時点でその評価をできるほど十分な感触はない。

なお、今年度は、雙峰祭はオンライン開催となり、研究室としても参加する。近未来の図書館／読書を考える通称「近未来シリーズ」の11回目となる今回は、「近未来図書館戦隊がまレンジャー」と題し、コロナ禍の図書館を救うための試みの紹介や新たな提案を行う予定である。現在、企画会議で学生が主体となって活動を進めているところである。

また、もう一つの企画である夏合宿は、緊急事態宣言が発せられる以前より集団旅行を避け、オンラインで行う方式を学生と検討してきた。今後の状況次第では、実施できない可能性もあるが、コロナ禍でも、物事を前向きに進めていこうと考えることは良い効果があると見ている。そのような、雰囲気を作っていくことがこのコロナ禍では必要とされていると感じている。

4. おわりに

コロナ禍で研究教育活動に制約が生じたことで、積極的、あるいは強制的に様々な試みを行うこととなった。必ずしも体系的に活動を進めていたわけではなかったが、面白がってツールや環境を利用しているうちに、それらを使った仕掛けや雰囲気づくりが重要であることが見えてきた。そして、その際に何もかも十分な準備をすることが必ずしも良いことではないというのも重要である。不便であるが故に自ら考え、新しい試みを進めようと力を発揮する学生が現れることに繋がっている。

これは、不便が益を生むという不便益 [3] の考え方に通ずるものがある。現在の状況は、オンライン化により壮大な不便益の実験を行っているとも捉えられる。この状況を前向きに活用できるよう促していくことが、研究室を主宰し、学生を教育するものの役割であると考えている。

しかし、その一方で、うまく動けずに立ち止まっている学生が多くいることも事実である。これらの学生を取りこぼすことなく、学習・研究へ向かわせることも大きな課題である。研究室運営においては、そのための仕掛けを入念に検討する必要があるだろうと思う。

参考文献

- [1] 国立情報学研究所: 大学等におけるオンライン教育とデジタル変革に関するサイバーシンポジウム「教育機関 DX シンポ」(online), 入手先 <https://www.nii.ac.jp/event/other/decs/> (2021.08.03).
- [2] 浦西友樹: コロナ禍での研究室運営 研究室運営に関するアンケート「我々は如何にこの難局を乗り越えようとしているのか」, 日本バーチャルリアリティ学会誌, vol. 26, no. 1, p.6-9 (online), 入手先 <https://doi.org/10.18974/jvrsj.26.1.6> (2021.08.03).
- [3] 川上浩司: 不便益: 手間をかけるシステムのデザイン, 近代科学社 (2017).